



TITLE:

房総丘陵のニホンザル野生群の遊
動生活(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

高杉, 欣一; 小金沢, 正昭; 仲真, 悟

CITATION:

高杉, 欣一 ...[et al]. 房総丘陵のニホンザル野生群の遊動生活(Ⅲ 共同利
用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1976, 6: 38-38

ISSUE DATE:

1976-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162703>

RIGHT:

(4) 研究の成果

日光市、栗山村、足尾町におけるニホンザルの分布の現状および明治時代以降の変遷の概要がほぼ明らかとなった。また、表日光地城については、環境利用の季節的变化およびここ数年間における群れの利用地域の変化に関する資料が蓄積されたが、予算不足により十分な調査はおこなうことができなかった。これらの成果の一部は、雑誌にほんごる特別号に発表する予定である。

(6) 研究の考察、反省

今回調査した地域においては、過去に hunting pressure があったものの、比較的最近まで自然環境が保たれてきた。その結果、日光市、栗山村、足尾町にまたがる連続した分布域が残されてきたものと考えられる。この分布域はさらに福島県、群馬県、新潟県へ続くものと考えられ、かなり大規模な地域個体群の存在が予想される。しかし、この地方においても、hunting pressure や各種開発に伴う生息環境の変化によって、一部地域での群れの消滅や、表日光地方に見られるような群れの利用地域の変化がおこっている。

今後、調査地域を拡大し、分布域の輪郭を把握すると同時に、分布とその変化に影響を与えている要因の分析を重点的におこなう予定である。

房総丘陵のニホンザル野生群の遊動生活

Q

高杉 欣一（東大・農）

小金沢正昭（東農工大・農）

仲 真 悟（千葉大・理）

野生群の生活実態を明らかにするために、元清澄山地区において、昨年度の経験にもとづき、本年度は、方法上いくつかの点を改良し可能なかぎり連続観察するよう試みた。

1975年11月9日～24日のべ113名によっておこなわれ、前半に野生群の探索・対象地域の検討・トランシーバーのテストなどをおこない、16・17・18・20日の4日間のべ30時間にわたって、とり囲み法による連続観察をおこなった。

とり囲み法は、2・3人組の調査班を数個野生群をとり囲むように配置し、トランシーバーで相互に連絡しながら、各班で5分毎に姿・物音・声などの観察事項を記載し、同時に5千分の1地形図に観察地点を記入することを骨子としている。そして、対象群の周辺に2・3の班を配置し、対象群に隣接又は接近してくる他の群れ又は個体をチェックした。

この方法では、観察されたすべての事実を記載することが難しいため、観察事項別に記載法の検討をする必要がある。すなわち、記載法の簡略化・統一化・記号化については、かなりの工夫の余地がある。

資料のとりまとめにあたっては、同一事項の重複観察のチェック、観察地点の確認、記載の表現の不統一と観察精度の不統一のチェック等をあらかじめおこない、姿・声・物音などの観察事項別に日周変化を調べ、観察された限りの野生群の空間的ひろがりの日周変化をとりまとめた。

資料は、目下とりまとめ中であるが、同様の調査を各季節にわたっておこないたいと考えている。

研究 成 果

1. 福田喜八郎・仲真悟・小金沢正昭・渡辺隆一（印刷中）。1975年秋季房総丘陵ニホンザル一斉調査報告；とり囲み法による連続観察について。
2. 仲真悟・福田喜八郎・1976、とり囲み法によるニホンザル野生群の連続観察、第20回ブリマーテス研究会。

ニホンザル地域個体群の骨格上の変異

○

高杉 欣一（東大・農）

岩野 泰三（東大・理）

小金沢正昭（東農工大・農）

本研究のための骨格標本は、地域個体群の骨格上の変異を論じる上では極めて貴重なものであるため慎重に整理を進めてきたが、大量処理が不可能なため、なお約3割が未整理である。ここでは標本の由来と構成を紹介し、埋葬遺体の発掘作業について簡単に経過報告しておく。

標本は、千葉県高岩山の天然記念物指定地域のニホンザルT-I群の一部と富津市豊岡の高岩山自然動物園で餌付けられていたニホンザルT-III群の一部、計78体の遺体からなる。このうちT-I群の個体は、1973年3月27日に捕獲され、約半年間高溝の吉田方に収容され、高岩山自然動物園に移管されたもので、移管直後T-III群とのケンカで死亡したもの、および翌年発生した流行病で大量死したものからなる。この流行病は、隣接するT-III群に蔓延し同じく大量死を惹起した。それに、1974年中に他の事由により死亡した若干のT-III群の個体を含む。

発掘作業は、1975年3～4月にのべ109人を投入しておこなわれた。遺体は動物園内の一隅、7.8m×3.5m程の区画内の3本のトレンチの深さ0.5～1.5mの間に埋葬されていた。発掘した遺体は、ニホンザル78体の他、タイワンザル(?)、ウサギ、鳥、各一匹であった。

ニホンザルの遺体のうちT-III群のオス第1位（三代目次郎長）以外は、所属群不明である。しかし個体の区別は比較的はっきりしていたので、埋葬状況のスケッチ・写真をとりながら、なるべく個体別に白骨化ないし白ロウ化した遺体を収容・包装した。持ち帰られた遺体は、ひとつひとつの骨の個体別を検討しながらひきつづき整理中である。